

たけ
武貝塚
(鹿児島郡桜島町)

位置と環境

武貝塚は、約5千年前に噴火を終えた桜島北岳北西に発達した扇状地に立地し、鹿児島湾を望む高さ約10mの崖上に所在する貝塚である。貝塚の所在する遺跡の範囲は、1988年の調査地を北西端として南に広がっており、扇状地内の微高地の先端部を利用した南北100m以上、東西50m以上の集落が想定されている。

調査の経緯

武貝塚の調査は、戦中の昭和18年(1943)京都大学の梅原末治と寺師見國の発掘調査が初見である。翌年には京都大学の角田文衛、小林行雄によって発掘調査が実施された(京大第I次調査)。その後、戦後の1949年に京都大学の小林行雄、坪井清足らがあらためて発掘調査を実施した(京大第II次調査)。その結果、大量の貝殻やイノシシ、シカなどの獣骨のほか、貝層下層から指宿式土器、貝層中から市来式土器と鐘崎式土器、貝層上層から市来式土器と西平式土器が層位的に出土し、南九州における縄文時代後期の土器編年が確立された。

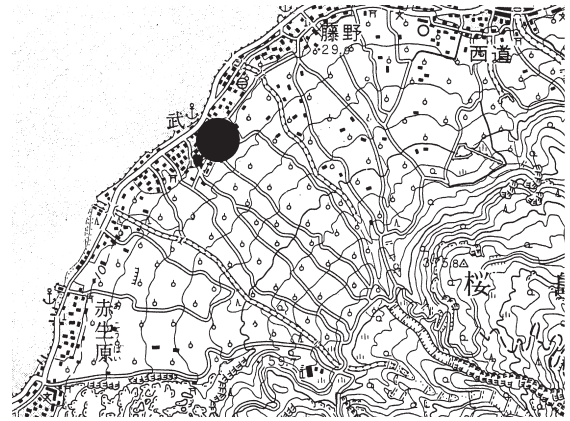
1988年、京都大学防災研究所付属桜島火山観測所と奈良大学文学部考古学研究室によって「災害多発地帯の「災害文化」に関する研究」として発掘調査を実施した。

遺構と遺物

1988年の調査によって、第II次調査地点の南西から南東にかけて良好な貝層が残っていることが確認された。遺跡の範囲は、扇状地内の微高地全面に広がる50haを越える規模と想定された。縄文時代の遺構、遺物包含層は、土石流に挟まれており、遺跡の存続期間は縄文時代中期末から後期後葉に及ぶことが明らかになった。土器は、指宿式土器、市来式土器、鐘崎式土器、西平式土器が層位的に出土し、大きくIV群30類に細分されている。そのほか、土製品、石器(石鏃・石斧・敲石・凹石・石皿・石錘・砥石・磨石など)、軽石石製品、骨角器、貝製品などがある。

特徴

発掘調査の結果、標高8.5m海浜砂層と、有史時代における桜島の隆起速度のデータから、縄文時代



第1図 武貝塚の位置

各時期の海水準の現在の標高が判明した。さらに、武貝塚の遺跡の盛衰は、扇状地と土石流に関係し、遺跡の放棄は土石流の結果と見られる。貝塚内の貝類をはじめ、多くの遺物、動物遺存体、炭化植物遺存体から季節を表すパターンが確認出来た。各層に見られる降下火山灰層から各遺物、動・植物遺存体の季節を特定でき、貝類の破碎状況から火山灰降下の季節は夏と想定された。獣骨類は、ニホンザルが他の遺跡と比べるとときわめて多い。上層にいくと数を減じており、噴火や土石流によって植生が貧弱であり、桜島の環境がイノシシやニホンジカに適さなかった可能性がある。

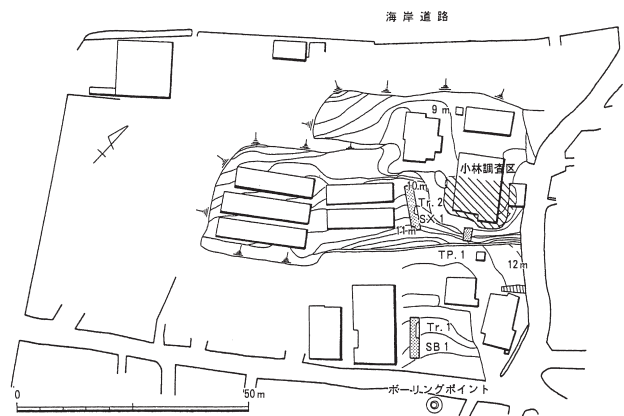
資料の所在

出土遺物は、京都大学考古学研究室・奈良大学考古学研究室に保管されている。

参考文献

奈良大学文学部考古学研究室1998「武貝塚」『奈良大学考古学研究室』第16集

(新東晃一)



第2図 発掘調査区